

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第十九号（二〇〇七年十二月）

ノウ・ハウからノウ・ホワイ

＝新しい會員を迎えた喜びの中におもつ＝

白井啓治

『ノウ・ハウ（如何にやるか）ではなくノウ・ホワイ（何故それをやらなければならないか）が大事なんだよ』

この話しを聞かせてくれたのは、水戸出身の経営コンサルタント中井川正勝氏であった。自衛隊の浜松術科学校の校長を経て産業界に移られ、スキル管理という経営マネジメント手法を創出された方である。生産管理技術部門の人で、中井川氏の名を知らなくても考え方を知らない人は居ないだろう。

海軍から航空自衛隊と所謂軍人生活に長く染み込ませた厳格な気質の上に、水戸っぽを自慢する迫力のある方であった。

氏のゴーストライターのようなことを引き請けたこともあり随分と可愛がって頂いた。特別師事したわけではなかったが、お前は俺の最後の弟子だ、と酒席でよくいわれた。

今日（十一月二十七日）、風の会の集まりに新しい入会者を迎え、雑談の中にふと中井川氏の言葉が思い出された。中井川氏が亡くなられてもう十数年になると思うが、何かの折にノウ・

ホワイという言葉とあわせて思い出す。

この「ふるさと」風」も「ふるさとルネサンス」に始まって今回で十九号になる。ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える、を掲げて色々な側面から形にとらわれないで、自分の考えや想い、発見などを言葉に表現して行こうと進めてきたのであるが、月一回の発行とはいえ、結構な負担になるものである。

しかし、全員が一度も欠けることなく十九号まで続けてこられたのは、ノウ・ハウの力ではなくノウ・ホワイの力であっただろうと思う。

ふるさと興しだとかルネサンスだとかの名で各地に様々な活動がされている。この石岡にも市をはじめとして商工会や商店会、また様々な集まりがふるさと活性化の活動がなされている。しかし、その殆どがノウ・ハウの発想しか持っていないといえよう。だから呼び屋的発想しか持たないのである。石岡でなければならぬ必然性が見られないのである。

思考が技法的なことにしか向いていないからである。技法は、確かな必然性が構築された後に生まれてくるものであって、何処かの成功例の技法を持つてきて、それに石岡らしいことをくつつけてみようとしてもうまくは行かないのである。だからムリが生じ、結果ムダ（成果を

望めない）を招いてしまうのだと言える。

小紙を、歴史を見直す、歴史を再発見する会報と勘違いされている方も多いようであるが、決してそうではない。打田昇三さんの、歴史エッセイとしての物語がポリュームの大きいのでそんな風に思われるのかもしれないが、そうではない。観光あり、ふるさとの中における日々の暮らしの発見を小文にまとめる人もあり、様々である。

文章のポリュームの大きい小さいではなく、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える、を軸にして、ノウ・ホワイ（何故それが必要なのか、何故これを書かなければならないのか）を確り持っていることが大切であり、會員の全員がその方向でふるさとの暮らしを紡ぐ視線で、文化として自己を表現しているの、一回も欠かさず原稿を出してくれているのだと編集を担当し、思っている。

幸か不幸かは別にして、小紙に評価の言葉を頂くのは市外、県外の方々が殆どである。しかし、小生はもとより會員の全員が、自分達の住むふるさとを自慢したいのだから、これは矢張り幸と言うべきであろう。

今日、新しい仲間を迎えることになり、久々の喜びと同時に、早速お持ちいただいた原稿を拝見しながら、ノウ・ホワイの言葉を思い出し、自分にとって何故それが必要なのか、何故これを書かなければならないのかを自覚することの重要さを改めて考えさせられた。

ノウ・ホワイを改めて思い起こされる中、四

く五年ほど前であつたらうか、歴史について戯れ書した文のあつたことを思い出し、データをはひっくり返し探し出してみた。こんなことを書いていた。

× × ×

歴史を学ぶ楽しさ、面白さは、点として現存する過去の事実を知り、その事実をもとにそこに覆われているものを細かく明らかにするべく、いろいろな仮説を創造し、その実証に向けて考察を与えることにあるのではないだろうか。同様に史跡を訪ね歩く楽しみは、史跡と対峙したときに聞えてくる物語にあるのだらうと思う。

現存する過去の事実とは、単なる氷山の一角に過ぎない。氷山の一角の存在を知ることには意味のないことではないが、存在の知ることのみに終わるのであれば、あまりにも受験勉強的知識の暗記で裡に響くものがなく、物足りない。そう感じるのには私一人ではないだろう。

歴史学の見地から考えると、事実としての存在した点、即ち原因とその結果における確かな時代、年号を明らかにすることは大いに意味のあることではある。しかし、歴史が面白いと感じるのは点としての事実よりも点から点を結ぶプロセスの中にあるといえる。このプロセスを私は勝手に物語と定義しているが、堅苦しい歴史書よりも、小説家の展開する歴史の方がはるかに興味深く、面白いのは、事実としてある点と点の間を結ぶ仮説としてのプロセス、即ち、物語が明確に語られているからだといえる。

個人的な考えであるが、歴史というのは物語

でなければならぬ、というのが私の意見である。物語というかどうかとも絵空事のように思われてしまいがちであるが、決してそうではない。自分の脚本業を弁護しているのではない。現にこの一週間を振り返ってみると、そこには大きな事件のようなものはないけれど、思い、考え、迷い、悩み等がいろいろに編み込まれた心の変遷としての物語が存在し、その中で〇日〇時〇分に頭をぶつけた、△日△時庭石に躓いて転んだなどの些細なことであるが点となる事件が起こっている。振り返って思い返したとき、記憶にあるのは頭に小さな瘤をつくった、膝を擦り剥いたといった事件だけであるが、その事件のこどだけを取り上げても一週間の歴史とは言えない。一週間の歴史といえはやはり、一瞬の事件の裏にある自身の生きて歩んだ葛藤や逡巡という時の移ろいであろう。

移ろうというプロセスの中に味付けのように存在する小事だけを捉えて並べてみても意味のなことはないけれど、興味の湧くものではない。それは現象を並べただけで物語として成立していないからであろう。

歴史を物語として認識されなくなったのは何時頃からののだろうか。おそらく学校教育におけるつまらぬ年号暗記に由来するのではないだろうか。英語には疎いのでかなりのこじ付けになるが、「歴史」という単語には、物語であるということが確り定義されているように思う。

英語で歴史は「HISTORY」と訳す。手元になんとした英語辞典がなく、調べ様がないの

で全くのあてずっぽうで私訳するが、STORY (物語) に HI: 過去という意味なのだろうか。或いは昔という意味なのだろうか。: を付けて HISTORY = 歴史としている。英語の歴史とは「過去の、昔の物語」をさしている。このような解釈が正解かどうかは全く分からないが、当たらずも遠からずではないかと思つてみるが正しい意味のご存知であればお教え願いたい。

英語の原義については、私の手の届くところではないので日本語における「歴史」の原義について考えてみたいとおもう。

「歴史」: 広辞苑第四版をみると、歴史とは、「人類社会の過去における変遷、興亡のありさま。又はその記録」とある。これだけでは歴史とは物語である、と断言することは難しい。もう一步進めて漢字の原義をたどつて考えてみたいと思う。

歴は、ガンダレ「厂」にノギ「禾」を二つ並べた音符の「レキ」(一定の間をおいて並ぶを意味する)の文字と、足跡を意味する「止」の文字が合わさって、次々に巡り歩くを意味する漢字となった。これが転じて現在では「すぎる」「月日がたつ」「経過した事柄」という意味を持つようになった。

史は、曆を作る人を意味する漢字で、それが進んで「歴史的な記録をつかさどる人」という意味を持つようになった。因みに「記録」とは、後々まで伝える必要のある事柄、即ち、物事の模様・内容について書き記すことを言う。

歴と史によって作られた言葉が「歴史」であ

るが、歴史の意味を漢字の原義に照らし合わせて考えると、「人間が、または人間社会がめぐり歩いてきた足跡、即ち、変遷や興亡にまつわる様々な模様、ありさま等を後世に伝えるべく文字によって書き物語ること」となる。「書き記す」としないで「文字によって書き物語る」としたのは、文字がまだなかった時代、更には大衆に普及していない時代にあつては、後世に伝えるべき事柄は、語り部によって物語られてきたことをうけ、敢えてそのように定義づけてみたのである。

語り部が、何かの出来事を後世に残そうと語り伝える意味には、自分の物語る中に後輩達が学ぶべきことの多くあることを知ってもらおう、という意図があつたと思われる。語り部の意図には当然のことながら、語り部自身の思いや願いが加味され、主観的に物語を構成していただろうことが容易に想像できる。

事実を知り、その裏にある真実を読む。このことは社会のいろいろな側面においていわれている言葉である。現象だけにとらわれずそこに隠されて在る真実を知れ、とも言われる。脚本では、物事の流れの中に人間を書けという。物事の流れの中に生活する人間を書き込むことではじめて物語となり、台本ということができ。また絵画においては、風景の中に感情を描けともいう。企業経営においても同様である。事実の認知だけで戦略を立てたら、モグラ叩きゲームとなりいずれその企業は倒産する。

こうした本質論から考えると、〇〇年□□で

△△があつた、というのは事実としての現象の存在を明らかにしただけのものである。これも歴史の範疇ではあるけれど、歴史の原義から考えると、その意義は十分の一、いや百分の一の段階といえるのではないだろうか。

今朝の新聞(朝日)に、体長十二メートルの巨大ワニの化石が発見されたという記事が載っていた。約1億1千万年前のものだという。約1億1千万年前に巨大ワニが生息していた、という事実をもって大発見というのではないのだろう。事実の発見により、顎や歯の構造が分かり、魚だけではなく小型の恐竜をも餌にしていたことが大発見という意義が与えられるのだろうと思う。

× × ×
読み返し、なるほど戯れ書である。しかし、手前勝手な戯言を書いてはいるが、自分自身の真実はうかがうことは出来るな、と懐かしんでみた。

ふるさとの明日を思うとき、自分自身の確りとしたノウ・ホワイを意識していれば、その視点の方向は何であつても良いだろうと思う。蹴飛ばした小石に今日の心模様を移して表現してみるのもいいだろうと思う。明日のふるさとを呼ぶ風には、台風もあれば無風という風もあるのだから。

今年最後の会報になるが、とても嬉し思いの風が吹いてくれたことに感謝をし、来年も色々な風が会報に流れてくれることを念じて筆をお

くことにする。

秋の夜の冷たく 一人せんべい蒲団

(ひそぢ)

狼へのレクイエム(鎮魂歌) 菅原茂美

狼を悪者扱いする話に、私は非常に腹が立つ。扱われた歴史認識は早々に改めるべきである。事の発端は明治維新のとき、西洋の文化はなんでも進んでおり、素晴らしいものだとする愚かな風潮が定着した点にある。

その最たるものが、イソップ物語の、狼は悪党だとする話だ。ヨーロッパでは、森林を潰し牧草地にするなど、人間が狼のテリトリーを侵略したことは棚に上げ、やむなく狼がたまに家畜を襲ったのを目の敵にし、悪魔や魔女の化身として恐怖の対象にし、徹底的に忌み嫌った。そのイソップ物語(BC3世紀頃)を明治政府は直輸入し、嘘つきはいけないと、教科書で国民を教育した。

しかし、日本の場合は弥生時代以来、農耕民族であり、労役用の家畜はいても、仏教の影響もあり、食肉を目的とした家畜飼養はあまり行なわれなかった。それゆえに、田畑を荒らす野兎、鹿、猪など草食動物を駆除してくれる狼こそ、最もありがたい動物であつた。狼はわが国では食物連鎖の頂点に立ち、自然のバランスを保つ貴重な存在であつた。そして儒教の影響もあり、狼は猛獣であつても儀を知り、道をわき

また優れた動物として神格化し、その名も、大神（おおかみ）から転じて『良いけもの』の字をあて『狼』と名付け、秩父の三峰神社ほか全国に狼を奉った神社が今なお十七社もあるという。

なお、『大口』という姓は、尊敬の念を込め、狼を大口様とも呼んだので、狼を奉った神社の神主の姓である。

私は、二〇〇三年九月、信州の千百年余りの名刹「光前寺」を尋ねたが、守り本尊は不動明王の化身『靈犬早太郎』（狼）で、厄除けの信仰を集めていた。

これほどまでに古より民衆の心を掴んでいた狼が、一瞬にして忘れ去られるとは、あまりに情けない。明治の前まで、神として奉った狼を、西洋文明にかぶれ、インツプ物語を無神経に直訳し、突然、悪者の代表にするなど、義理を欠く日本人の浅はかさに腹が立つ。そして日本人の犯した大きな罪。それは本州のニホンオオカミに、狂犬病や洋犬輸入によるジステンパーを感染させ、一九〇五年までに絶滅させたこと。更に明治政府の次三男対策としての北海道開拓においては、寒くて米が取れないため、畜産を導入し、一部狼の被害にあったことから、国の政策として、硝酸ストリキニーネを大量輸入し、その毒餌や罠や銃により、懸賞金付きで、一九〇〇年までにエゾオオカミを絶滅させたことである。

この世で最も罪深いことは、復活の芽さえ残さず、根こそぎ奪い取り、種の絶滅につながる

乱獲や、駆除をする行為だ。人類も自然の一部にすぎない。その人類に、他の種を絶滅させる何の権利があると言うのだ。

狼を祖としながら、人に飼われ、野生を失って尾ばかり振っている犬は、全くの腑抜けになり下がってしまったが、誇り高き狼の、仲間を呼ぶ孤高の吠え声は、人間の侵略により、多くの同胞を失った『怨み節』とも、哀愁の『悲歌（エレジー）』とも聞こえる。

せめて罪滅ぼしに人類は、シベリアやカナダにわずかに残った狼が以後安全に生き、食物連鎖の原則がキチンと守られるよう、環境整備に全力を尽くすべきである。

愚かな歴史を反省するとともに、許せ！安らかに眠れ！と狼の霊に、付して陳謝する。

さて似たような話であるが、狐と稲荷神社は別の話。

「一附 狐が稲荷神社に奉られている由来

稲荷神社は全国に三万社もあり、日本で最多の信奉者を持つ。江戸では、「伊勢屋、稲荷に犬の糞」といわれるほどに稲荷は多く、大阪では「菓弘法、欲稲荷」といわれ、中世から近世にかけて、本来の農業神に加え、商売繁盛、さては出世祈願の神として信仰を集めた。

江戸中期、田沼意次が紀州藩の小姓から五万七千石の大名、ひいては老中にまで出世したのは、邸内に稲荷を奉っているからだという話が広がり、武家は競って稲荷を奉り、そして町民にも広がっていったという。

稲荷は元々、稲を荷う、即ち五穀豊穡を願った農業神であったが、神仏習合（しんぶつしゅうごう）が進展すると、稲荷神社の守り本尊は、仏教の茶枳仁天（だきにてん）となり、ダキニ天は白狐に乗っている姿から狐は稲荷神社の使いと信じられるようになった。そして、厄除けの狛犬の代わりに、狐の像が置かれるようになり、好物の油揚げが供えられるようになった。

（出典・エンカルタCD-ROM他 二〇〇四・一・二五記）

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。

入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

菖蒲沢の薬師如来さまと 小林幸枝

今年最後になることば座の十二月定期公演が、菖蒲沢の薬師堂をモチーフとした「緋桜怨節」を演じることもあって、この所ズーツと薬師堂や薬師如来さまのことが頭の中を一杯にしています。

先月号にも、薬師古道と薬師堂のことについて書いたのですが、今月も薬師様のことを書いてみたいと思います。

薬師古道として広く整備された道の無念さは前回にも書いたのでやめにしますが、薬師堂と薬師如来様、そしてその前にある弁天池は、とても素晴らしいふるさと遺産だと思います。行かれたことのない方には是非一度、散策に出かけていただきたいと思います。

公演のチラシに使う写真を取りに出かけたときには、山はまだ色づいていませんでしたが、弁天池の前に、立って撮影をしていると、小さなドングリの実が時々目の前に落ちてきました。私は、音を聞くことはできませんが、枯葉の上で落ちる時、どんな音楽になるのだろうか、想像の中に想いました。しかし、森が出来ず残念な想いになりました。しかし、森の中を抜けてくる風を頼に知った時、薬師如来様が私の心に、素敵な音楽でしようと伝えてくれたような気持ちになりました。

今、薬師如来様は、お堂から出られ、公民館で修復のためにバラバラにされて休んでおられます。

撮影に行ったときには、公民館も堅く窓が閉じられていて、バラバラなお姿も見ることでは来ませんでした。

今私は、イメージの中に薬師如来様と話を交わしています。

『今日はとても外は寒く、今年初めての冬の木枯らしです。薬師如来様は、今年は暖かくおやすみになれますね』

『いえ、私はあのお堂の中に居ても寒くはありませんでしたよ。三百年以上ズーツとあそこに座っていましたが、一度だって寒さを感じたことはありませんでしたよ。十分に枯れたこの木の身体の温もりはどんな寒さにも大丈夫なのですよ』

『長い間一人で静かに時代の流れを見つめてきて、お座りの台座も随分虫に食われてしまったと新聞にありました。綺麗にお直しいただいたら、今度は雨漏りのないお堂にまた長く私たちを見守っててくださいね』

『ええ、ええ、私も早くこの夜昼の分からない、風もないところを出て、また森の風と話をしながら、これからの時の流れに皆さんを見たいですよ』

イメージの中ですが、薬師如来様は穏やかなお顔で、私に会話を下さいました。

薬師如来様は、春には修復が終り、またあの石段の傾いたお堂に安置されるのだろうか。

元気な如来様がお堂に帰られたら、今、一生懸命に稽古している「緋桜怨節」をふるさとの

未来への応援歌として、演じ奉納してみたいなと想い描いてみたりしています。

ことば座12月公演「緋桜怨節」「里の舞い歌」

石岡市菖蒲沢の薬師堂に登る山道を、薬師古道と名付けて大名が駕籠で登るような山道にしてしまった。殿の御成りの邪魔だといわんばかりに桜の古木も首を打たれてしまった。そして今、朽ち果ててきた薬師堂の修復が始まったのだが、どうか全きを保つ修復が行なわれんことを祈っている。ことば座12月公演はそんな祈りを込めて、桜の古木に変わっての「緋桜怨節」を、小林幸枝の手話語り劇でおとどけます。その他、「里の舞い歌」と題して、ふるさとへの思いを恋歌に乗せて朗読に舞います。

12月16日(日曜日・ギター文化館午後2時開演)

(入場料・3000円 前売券・2500円)

ことば座 石岡市府中5-1-35 0299-24-2063 fax 0299-23-0150

ギター文化館 石岡市柴間431-35 0299-46-2457

猪突猛進。猪の勢に乗って、今年もあつという間に師走に入りました。拙い文にも関わらず、みなさんのご愛読に励みを頂いて、今年最終号を迎えることが出来ました。

それぞれの立場から石岡の歴史について、熱く語る人、後世に語り継ごうと文章に託す人、調査・研究なされた資料も惜しみなくご提供下さった方、この一年間で街のみなさんとの交流が広がりましたことが、何よりの喜びでした。

歴史的遺産の保全と保護を熱く語られる先生「茨城の民族」誌六冊を一年間との約束で貸して下さった陶器店主さん。「貝地の昔話」誌を発行され、今なお茨城廃寺について等を研究なさっている貝地のみなさん。常陸郷土資料館誌「常陸」や、鈴の宮稻荷神社について、天狗党や昭和初年代の街の様子を語ってくださった洋服店主さん。

石岡市歴史ボランティアの会員として、ふるさと風の会員として、石岡の生きた歴史に触れることが出来、参考にさせて頂きました。ありがとうございます。

石岡の歴史かたりべさん、各個人で保管されている資料、遺物などのお宝物、発掘した遺跡等価値ある物、各町内のお祭りでの山車やその人形等、数々の文化財、これらのものがいつでも一同に、私達の目に触れることが出来ていましたら、石岡市そして市民のみなさんの心も、どんなにか潤っていたことでしょう。

「百聞は一見に如かず」どんな名著よりも、どんなに流暢で実のある説明よりも、そして歴史に興味を抱けないみなさんにも、心打つことにちがひありません。

このご時勢にとお叱りをうけるかもしれないませんが、今の世よりも、孫・曾孫と後世のために、市民のみなさん、お一人お一人のささやかでもご寄付（ちりも積もれば山となる）によって展示館が創立されたらと大きな大きな夢を膨らませる一年でした。

年々、石岡の歴史に関心を寄せ、尋ねてくる方が確実に増えております。

ギター文化館発

常世の国の恋物語百

ことば座2008年定期公演の日程が決まりました。

第6回公演	2月17日(日曜日)
第7回公演	4月20日(日曜日)
第8回公演	6月15日(日曜日)
第9回公演	8月17日(日曜日)
第10回公演	10月19日(日曜日)
第11回公演	12月21日(日曜日)

2008年「ことば座夢クラブ」年会員募集中!!

平成20年「ことば座夢クラブ」年会員(一万円)を募集しております。会員様には、ギター文化館での定期公演の入場のほか、ことば座主催の公演の割引、年四回発行の季刊紙の送付などの特典があります。

詳しくはことば座事務局

0299 24 2063

fax 0299 23 0150

までお問い合わせ下さい。

ことば座

〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

石岡市歴史ボランティアの会で、ガイドとして人の為にお役に立てた喜びを味わってみませんか。また、活字で石岡の自慢、ご意見をという方は、当ふるさと風の会に是非寄稿下さい。新しい年が、みなさまにとりまして健康で輝ける年でありますように。

場内 かけめぐる「喜一幅

ちえ」

第四十八回石岡市芸術祭にて

今年の夏の暑さには堪えた。体調を崩し、身体全体に異常が起きた。これも元氣にかまけて自分を大切にしなかったことへの忠告かと、病院にかかっていた矢先、主人が救急車で運ばれるという事態が起きてしまった。

一大事と緊張が走り、自分のことなど何処かに置き忘れたような秋を過ごした。それでも、勝手さは常に頭を持ち上げている自分に気付く。主人が入院してからも、予定表をうずめた日課は、前よりも充実させて進めていた。

「心配したって何の助けも出来ないのだ。お医者者にお任せするしかない。私は、私のやることを確りやるだけ」

そう言い聞かせ一日一日を過ごしてきた。

「お前はそれでも女か。ひとつも女らしくない」「そうですか」

「お前は男なんだぞ。何だと思ってるんだ」玄関を開けたとたん、こんなやりとりが天上から聞こえてきたようだった。

帰ってひと休みもそこに夕食の支度にかかる。一人の食事は、野菜の残り物や冷蔵庫のすみに乾涸びた肉などあり合わせになりがち。味噌汁も何度同じものをすすった事か。食べ物の内容よりも、早く座りたいという気持ちだった。そんな夕食の支度の中、

「煮物の味付けはサ・シ・ス・セ・ソの順によく煮てくださいね。いつも薄味で美味くない」

「わかってます」

「焼き魚は焦げないようにまめに網をかえして、ていねいにやります」

「うるさい。何でもいいんです」

「そうはいかない。へんなものを喰わされちゃかなわない」

「もう別々にやりましょう」

そんな、元氣な時の言い合いが思い出されてきた。

夜、煩わしいと思う姿を見ることもなく、明日のことを考えひとりふけていると、チビリチビリ一杯二杯とすすめる姿が思い出されてきた。相手をするとすぐに言い合いになるから何時も方向を変えて自分のことをしていたのだった。そのうちに長電話が始まる。

「時間が遅いですよ。相手の都合も考えて」

と口を出して気まづくなるのが何時ものことであつた。茶の間の空間が、静かすぎると、空気に流れのないことに気付きながら、そんな煩わしいこともない今こそ手足を伸ばして自由さを満喫しなくては、と言いつ聞かせてみる。

病室では今頃一人でテレビを見放題。若い看護婦さんに優しい言葉をかけられ、気を良くしていることだろう。同室の人たちと他愛もない話しを楽しんでもいるだろう。自由の少ない病室にも、それなりの楽しみや喜びがあるのだろうと思つてみる。

さて、寝なくては、と戸にしんばり棒をかい、床につく。目を閉じ、煩わしさのない一日が終わったと言つてみたが、これまでの一日が本当

に煩わしいものだったのだろうかと降り返る気持ちの見えた。

朝、元氣に家を出る。邪魔されずその日の予定をこなしていける一人身の楽しさなのか、鼻歌がついて出る。

しかし、困ることを今更の如く発見したのだ。急ぎの用や遠くへの足には自転車では間に合わないことである。庭に置かれたままの車を見ながら思いついたのだった。

「何でも言え。用は足してやる」

そうだったのだ、と知ったのである。しかし、同時に又、

「あぶない！ 運転する身になれ」

「あつち、こつちじゃなく、右、左とはつきり言え」

もう乗せてもらいたくない。何度頭を下げながら思うようにならない悔しさを感じたことだったろうか。しかし、そんなことを思い返しなから、何もない人間の普段というのは何て勝手なものなのだろうと、反省の気持ちが湧いてきた。

自分だけが自由な時間を使っていることへの後ろめたさではないが、毎日新聞を届け、洗濯物を持ち帰ることも一日の日課としている。

もしかして主人が病氣になったのは、私の所為かと考えたこともあつた。日常生活の中で興奮させたり、心配をかけたたりすることが原因となつて起きたのかもしれない。だったら申し訳ないな、と思いつながら病室に入ると、

「寒い中来たのか。こういう心配をさせるか

ら心臓がドキドキして病気になるんだ！」

とききなり言われた。はらわたの煮えくり返るのを、同室の人の手前押さえて、無言で入れ歯の水をとりかえ、洗濯物を袋に押し込み、新聞を置いて、同室の人にだけ笑顔を見せて、暗い町へ出ていって駅に向った。

「ああ、どこまで平行線なのだろうか、私たち二人は……」

一人でいることは寂しくもないし、かえって自由で良い筈だったのに、実際に一人にいとあれこれと思うことの何と多いことかと、考えさられたこの一カ月半であった。

打田昇三歴史エッセイ

ふるさと「風にたずねて」()

小紙に毎月連載されている打田昇三氏の「ふるさと歴史探訪」が二冊の小冊子にまとめられて、ふるさと風の文庫として発売することになりました。(二冊組：1000円)

小さな手作りの文庫本ですが、風の会のふるさとを思う心が一杯の本です。

冊子は、ギター文化館、中町商店街カフェ・キーボーにて販売しています。

文学の大国

打田昇三

日本でも「兵馬俑(へいばよう)」の展示などで知られている「秦の始皇帝(しんのしこうてい)」は奇異な運命から専制君主に登り詰めた人物だから強引な独裁政治で国内を統治した。代表的な事件が「焚書坑儒(ふんしよこうじゆ)」で農業書を除く全ての書物を焼き払い、非難した学者四百六十余名を生き埋めにしたという。

これにより、紀元前の中国における歴史の幾分かが不明になった。

始皇帝の死後、当然ながら諸国の農民などが蜂起して秦が滅亡、蜂起軍を指導していた項羽(こうう)と劉邦(りゅうほう)が対立して争ったが、項羽は虞美人(ぐびじん)という愛妾とのロマンスを残して破れ去った。劉邦は漢の高祖として皇位に就き、紀元前202年から大漢帝国が中国に生まれる。私は中国の文字が「漢の時代」に完成したので「漢字」というものと思っていたが、そうではないらしく、「漢民族が使っていた文字」という誇りを持って「漢字」と呼ぶらしい。その漢字が文字の無かった日本に初めて伝えられたのが記録的には応神天皇の時代(西暦285年)とされており、百済(くだら)の王から「論語」などの書物が献上されたことによる。しかし、朝鮮半島に百済国が顔を出すのは西暦300年以降のことらしいから年代的に疑問もある。

それ以前の日本は「鬼道を事とし能く衆を惑わす」つまりテレビで大流行の占い婆さんのよ

うな卑弥呼(ひみこ)が統治していたというから恐ろしい国ではあるが、それを垣間見る史料としては「魏志倭人伝(ぎしわじんてん)」しかない。日本の何処かに存在していた幾つかの国々、中には邪馬台国(やまたいこく)というのがあったかも知れないが、専門の先生方が研究を続けておられて諸説が展開されている。それは西暦200年代に実在した大陸の国「魏」で日本のことも序でに記録されていたから分かるので考えれば実に有難い。

日本の歴史を伝える本は「古事記」も「日本書紀」「諸国風土記」もあるが、二世紀、三世紀或いはそれ以前のことでも記録しているのに、出来上がったのが八世紀となれば、食品なら賞味期限切れで、誰でも内容に疑問を持つのが当然であろう。文字が普及しなかった時代では去年のことも思い出せない。情けないことだが日本の古代について信頼出来る史料は魏志倭人伝だけになる。

400年程続いた漢が衰亡した後、騎馬民族の鮮卑(せんび)が居る万里の長城以北を除いて中国大陸は三つの国に分割された。西の「蜀(しよく)」南の「呉(ご)」そして現在の洛陽を中心に敦煌(とんこう)辺りから朝鮮半島の西部まで押さえていたのが「魏(ぎ)」である。有名な軍師の「諸葛孔明(しよかつこうめい)」が居たのは蜀の国であるが魏も蜀も呉も数十年で滅びてしまったのだから「魏志倭人伝」が日本

本のことをよくぞ記録しておいてくれた。中国の文字は漢字である。当然、古代日本に

伝わってきた文字も漢字である。

応神天皇時代に漢字が伝来したという記事を信用すれば、持って来た百濟(朝鮮半島)の人たちも漢字を使っていたことになる。文字を知らない日本人に言葉の違う朝鮮民族が中国の文字を持ってきてどうなるのだろうか？私は日本の歴史を知った時点から疑問に思っていたが、縄文人を駆逐して弥生文化を齎し日本各地に小王国を建てたのは朝鮮半島からの渡来人だと知って納得した。勿論、大和朝廷もそうであろう。その背後には中国大陸の圧迫があったから朝鮮及び日本の為政者は、何よりも漢字の理解を急務としていた。漢字が現在の日本語の中に溶け込んでいるのは、そうした先人たちの労苦の賜物である。

昭和初期から構想が立てられ、戦時期を挟んで物資不足に苦しんだ上に空襲で壊滅的な被害を受けながらも関係者の不屈の努力で再興に取り組み、遂に昭和三十五年に刊行されたのが諸橋轍次博士の「大漢和辞典(大修館)」である。収録漢字五万二千九百九十四字は当時に存在した漢字の殆どを網羅している。それまでは中国の清(しん)代(1716)に完成した「康熙字典(こうきじてん)」が四万二千余字で世界一の漢字辞書だった。大漢和辞典はそれを越えたのだが、何分にも分厚で膨大な量になり値段も高価だった。昭和四十年代になると印刷技術の向上により「縮写版」の発行が可能となつてA5変形版(各巻1200頁ほど)のもの十三巻が世に出たのである。

中国では古代黄河文明を継承する殷(いん)王朝の時代(約二千五百年前)に牛の肩胛骨(けんこうこつ)や亀の甲羅を焼いて、亀裂の状態から物ごとを占った。幾つか彫り込んだ記号のどちら側に亀裂が走るかで吉凶、善悪、行動の可否、神の意志などを承知したのである。その甲骨占いから文字が創始され、それが一定の形になつて金文として青銅器などに刻まれた。周や秦の古代国家では文字として使われ、歴代の王朝が改善に努めた。気に入らない図書を焼き尽くした秦の始皇帝も文字の統一には貢献している。

文字とまでは言えなくても「絵文字」らしきものが中国で使われたのは、旧石器時代後期、一万年以上も前のことであるから、殷王朝時代に占いに用いられていた「簡単な文字」はかなりの種類があつたことが想像できる。しかし広大な国土を持つ中国の国民は大らかなもので文化の中核に関わる国家の文字についても、その成立がどうか考へるのはごく一部の学者に限られていて、多くの人々が文字は神様が創つたものだと思つて疑わなかった。

中国最初の正史と言われる「史記」は、漢の高祖・劉邦から七代目の武帝に仕えて中国歴史家の父と称された司馬遷(しばせん)が、諸橋轍次博士のように苦勞をして完成させたもので「後世史書の鑑」とされている。史誌編纂の勞苦に加えて、司馬遷は友人の弁護をしただけで「宮刑(きゆうけい)——男性のシンボルを除去される刑罰」を受け、歌舞伎の女形のような格

好になりながら男子の魂は失わずに大著作を完成させた。中国の草創神話では「三皇五帝」と言う八代の優れたリーダーが登場する。司馬遷は敢えて史記を五帝の時代から書き始めて三皇を外した。三皇は蛇身人首・牛首人身とか夫婦一体など怪奇な神様の世界そのものだったから、屈辱的な刑を受けた司馬遷が神への腹いせに記録しなかつたのかどうかは知らない。

しかし伝説ではあるが三皇一番目の「燧人氏(すいじんし)」は文字どおり火起具を使って人類に火の使用を教え、一番目の「伏羲(ふくぎ)」は、苗族の伝承だと言われるが、ペアになつていて「女媧(じよか)」という奥さんと一緒に、八卦、婚姻制度を定め、農・漁業を開始し家畜を飼ひ、そして文字の使用と音楽を広めた。三番目の「神農(しんのう)」は薬草採取と商業が専門で日本でも露天商の神様として崇拜されている。史記の世界では最初の「三皇」は認知されない神様になつてしまったが、「キツチリ」と仕事をしている。日本の古事記でも最初に出てくる三皇に相当する「天御中主神(あめのみなかぬしのかみ)」「高御産巢日神(たかみむすびのかみ)」「神産巢日神(かみむすびのかみ)」があるが顔見せだけで引つ込んでしまったから何の神様だか分からない。

伏羲あたりの頃が西安市郊外半坡(はんぱ)遺跡に代表される「母系制原始共産社会」の彩陶土器文化時代だと推定される。文字の原形を創つた「殷王朝」の前には「夏(か)王朝」があつたらしいけれど、遺跡が未だ確定されてい

ないために中間が途切れてはいるが、既に文字の原形になるものは彩陶土器時代から存在していたのではないだろうか。ともかく動物の骨に刻まれた「文字の先祖」が中国国民の目に留まる迄に三千年以上の年月が過ぎていたのである。

十九世紀末の北京に、日本なら東京大学の学長に相当するような偉い学者で青銅器・古代碑文の研究者が居た。この先生はマリリアの持病があつて発作に苦しんでいたのだが、知人の勧めで「龍骨」という漢方薬を飲んでみた。架空の動物に骨がある訳はない。怪しいものだが古い医学書にも書かれていることなので友人が届けてくれていたのである。化石状になった牛などの骨らしい。

学者仲間や弟子たちが集まっていた席で先生が薬を服用した。骨を削るのだから周りの者は興味を持って見ている。薬箱の中を眺めていた一人が、何本かの骨の表面に刻み込まれたような文字らしい跡を見つけた。碑文・金石文を研究しているメンバーだから、猫が鱧節工場を発見したような大騒ぎになつて、早速、薬種問屋を説得して生産地（骨の出土地）を聞き出すとともに、市内に出回っているマリア特効薬で記号入りのものを買集めるなど、文字発祥の基本的な研究がようやく西暦1900年頃になつて始まつた。

甲骨文字が刻まれた骨の出土地は中国・河南省の安陽で、その付近は殷王朝の都が置かれていたと伝えられる場所である。その時代は何事も占いで決めていたようであるが、日本でも古

ことば座「風の塾」絵と一行文教室

ふるさとの風を、大切な言葉や色に表現してみませんか

講師：兼平ちえこ・白井啓治

言葉とは、心を口に茂らせること。心とは真実。口とは真実を表現する全ての手段のこと。

ふるさとの風を色に刷いて、暮らしの中の発見を一行の言葉に落とす。一切の形式を忘れ、表現の基本である「自由自在」を大切に考え、筆の遊びを楽しむ教室です。絵の講師、兼平ちえこは、ふるさと風の会会員で、ことば座の舞台装飾を担当しています。

絵や文に抱いている固定観念を取り払って、自分を楽しむことに一生懸命の教室には、何時も笑いが絶えません。「老いても青春」を主張し、「常世の国の恋物語百」に挑戦する脚本家：白井啓治の「ちゃんと恋をしてる？」の話の下、箸が転んでも可笑しい青春を絵と言葉の中に再発見し、自分自身を褒め、楽しむ教室です。

教室は、毎月第一、第三金曜日、勤労青少年ホームにて午後一時半～三時半まで開いています。見学、体験は何時でもご自由におこし下さい。教室の詳しいお問い合わせは下記連絡先まで。

兼平ちえこ 0299-26-7178

白井 啓治 0299-24-2063

事記」の「天の岩戸」の項目に「天児屋命（あめのこやねのみこと）が「布刀玉命（ふとだまのみこと）」に命じて天の香具山の鹿を捕えさせて肩の骨を抜き取り樺の木で焼いて占いをさせた記録がある。この記事は日本でも甲骨文字が出来る要素があつたことを示しているが、日本に漢字が伝わり普及したのは朝鮮半島の国々と密接な交流が始まつてから（朝鮮半島の王朝が

日本に進出してから）であろうから、天照大神以来、文字の研究などは行われず何事も「ムニヤムニヤ」押んで済ませてしまつていたのか？とところが不思議なことに天児屋命は、この岩戸事件の時に大声で祝詞（のりと）を読み上げているのである。安宅関の弁慶ではあるまいし、文字の無い時代に神前で祝詞が読める訳が無い。日本の国創り神話が漫画的なのは、そういう辻

棲が合っていないからで、結局は古事記の記事が中国大陸から持ち込まれた話であるか、或いは天照大神など大勢の神様が存在した時代が、神代ではなくて漢字到来後の初期古墳時代（大王、豪族の時代）になるのである。

古事記と同じ頃に別のルートで編纂された「日本書紀」には「一書曰：（あるふみにいわく）」という表現が頻繁に出てくる。日本書紀と古事記の編纂時期は同じであるが書かれた内容が微妙に違っている。「一書曰：」は過去の歴史を記録した資料がこちらに在ったことを示している。初期の日本人は文字を創り出すことはしなかったが、伝えられた漢字を利用して多くのことを記録していた。しかし王朝が変わり権力を奪うに当たっては陰湿な策謀と強引なクーデターが頻繁に行われた関係で、正確な歴史が後世に伝えられると都合が悪い。そこで多くの真実が隠され消され古事記に集約されたように「混沌とした世界から現れた神様が、逆らう者たちを退治して美しい国を創る」神話に裏付けられた万世一系の大日本帝国の歴史「三皇五帝編」が創作されたのである。

も把握していた漢字は三千ぐらいだと言われている。漢字を作った中国の人たちは必要も無いような漢字を製造し、漢字だけを使っていたから上級学校へ行けない人たちはどうしても学力が落ちる。そこで、近代は画の多い複雑な漢字は簡略化し、例えば「働↓働」「街↓于」「幾↓几」「児↓几」「従↓从」「機↓机」「闘↓斗」など千字以上の簡体文字を作り出している。日本でも「櫻↓桜」「國↓国」「學↓学」「與↓与」「蠶↓蚕」「團↓団」などは簡略した漢字を使用しているが、元の字の面影は留めている。漢字はその成り立ちに意味があるので、単純化すれば良いというものでもないらしい。長い中国の歴史から生まれた漢字は、今やその正統なものが日本にしか無いようになってしまった。

漢字は生まれた段階で原則的に表意文字であったから、最初に漢字を会得した朝鮮民族は四苦八苦して何とかこれを読めるようにした。その過程で考え出された表音文字のハングルが完成するのは十五世紀である。弥生時代から日本に渡って来た朝鮮の末流王族たちは気候温暖で資源に恵まれたこの国が気に入って山陰、九州を中心に幾つかの王朝を建てて先住民を征服し、遂に大和朝廷に収束されるのだが、彼等も漢文の扱いには嫌気がさしていた。何よりも日本列島は大陸と違い四季があり山紫水明、地形の変化や人情風俗、自然現象を表現するにしても、広漠たる大陸で生まれた四角四面の漢字だけでは思うようにいかない。文字は其処に住む人間が「生きる」ことを記録するものである。

渡来人だけの世界なら漢字だけで済ませていられるが、日本人としての文化が芽生えてくると微妙な状態を表す文字が必要になってくる。我が国最古の漢文文字は熊本県の江田船山古墳から出土した太刀に刻印された七十五字の銘文である。大半は判読できず時代も特定出来なかったが、同じ頃に埼玉県の稲荷山古墳から百十五文字を刻んだ鉄剣が出土し、この銘文が船山古墳のものと同様と酷似していた。X線写真などから西暦400年代のものだと判明したのである。それから200年ほど後に聖徳太子が書いたとされる「法華義疏（ほつげぎしよ）」―法華経の注釈―は肉筆による我が国最古の漢文の書とされるが、文字の品格や美しさは当然として、記載内容には漢文使用上の誤りが多いとされる。エリート第一号のような聖徳太子さえ漢文で百点は取れなかった。日本の文章表現に漢字だけでは合わないと感じた飛鳥、奈良、平安時代の文化人たちは、先ず、漢文と漢文を繋ぐ表音文字の「かな」を九世紀に創り出すとともに、漢字には無く日本の風土には必要な漢字（国字）を少しずつ作っては使用していったのである。

「佛（おもかげ）、杣（そま）、枡（ます）、風（こがらし）、風（なぎ）、風（たこ）、峠（とうげ）、糍（こうじ）、鏝（かすがい）、釘（くぎ）、鋌（びよう）、筆（むしる）、風（おろし）、問（つかえ）などから鱈（たら）、鯨（かすのこ）、鯛（いわし）、鱒（はたはた）、鱒（さわら）、鯨（どじょう）などなど。…こうして日本人用の繊細な表現が出来る文字が誕生した。

然しながら、先祖が苦勞をして造り上げたものでも、時代が変われば子孫に敬遠される例は多い。言語・文字の世界でも同じである。大漢和辞典が完成した時代あたりから公用文を中心に「文章はなるべく平易に書く」という行政の指導があり、外来語の増加と重なって“漢字は難しいもの”として敬遠する風潮が現れてきた。その反面で文筆家の著書や人名の選定に際しての漢字乱用も問題になり心血を注いで世界一の漢和辞典を完成された諸橋轍次博士を嘆かせた。要は、漢字（実質的には日本の文字となつていく漢で生まれた文字）が適切に使用されることが大切なので、近年に至ってテレビ番組などに「漢字」が取り上げられ庶民の関心が「日本語」に向いていることは喜ばしい。

漢字の本舗、漢字しかない中国でも複雑な構造の文字を簡略化する動きのあることは既に述べたが、欧米諸国との交流も行われるようになって、いわゆる横文字が目につくようになると突飛なことを思いつき中国語をアルファベットで表現してはどうか？とする意見も出たようである。なにしろ五万もある漢字を二十六個のローマ字で表わすのだから覚える字数は極端に減る。しかし：

この話は、漢字敬遠の風潮に憤慨しておられた諸橋轍次博士が「日本の国土で発達してきた漢字漢語への熱い想い」を綴られたエッセイに紹介されていたもので、中国語アルファベットの意見が出たときに猛反対論を展開した学者が皮肉を込めて創作した話だそうである。

「石室詩史施氏、嗜獅、誓食十獅、氏時時適市、視獅、氏適市時、適十獅適市、氏恃矢勢、使是十獅逝世、氏始食是十獅、食事始識十獅、實石獅、試積是事、」

（和訳）「宮廷図書館の役人だった施氏（姓）は奇妙な食べ物が好きで、特に獅子の肉が嗜好品であった。彼は生涯のうちに十匹の獅子を食べようと心に決めていた。施氏は時々、狩猟の目的で町の郊外に行つては獅子を見つけて歩いた。或る日、草むらの蔭に十匹の獅子を見つけた。狩（弓）を得意とする施氏は、ここぞとばかり連続して矢を放ち、十匹の獅子を倒した。施氏は望みどおりに獅子十匹を食べることが出来るようになったのだが、その時に、十匹の獅子は実は獅子の石像であることに気づいた。皆さんは試みにこの話がどういうことか解釈してご覧なさい」（二部、私注を含む）

中国語の場合には四声（しせい）という音韻（抑揚）があり、例えば「1（イー）は平に発声し」「2（アル）は一気に下げて発声し」「5（ウー）は掘り起こすように発声し」「10（シ）は途中から上げて発声し」の四通りの発声で文字の意味が変わるため、言葉で聞けば全く同じではないが、この文章をローマ字書きにすると全部の文字が「shih」の一語のみになるそう、四声の記号が付けられていても相手

には通じないであろう。この例文はローマ字化反対の意図で作られた極端なものであるが、似たような例が起らないとも限らず中国語ローマ字化案は消えたのである。

漢字だけの中国語を使い易くする手段は、結局、文字の一つ一つを簡単にするしかないらしく既に従来の形から変えられた漢字が数千は有りそうである。その方法は偏や旁（つくり）を直したり、読みの似たような字で代用させる方法だと推定できるが、漢字を母体として言語を發展させてきた日本人にとっては、近代中国語の文字も他の外国文字と同様に全く類似性の無いものになってしまった。漢字使用民族としては残念ながら、今や中国産の漢字は中国語のために、そして本来の漢字は日本語のために存在しているのである。実質的に漢字の王道を守る日本では辞書の電子化に始まり、パソコンからも携帯電話からも、ゲーム機からさえも難解な漢字が易々と検索出来るようになった。

現代は言葉（発音）さえ知っていれば指先だけの操作で難しい漢字が手軽に表記出来るから「文章を平易に書く」などと言わず、自分では書けなくても四字熟語などを使って堅苦しい文章を作る人が増えてくる。パチンコの機械やゲーム機にも難しい漢字を並べたタイトルのものが増え、大相撲で横綱になる挨拶にも「四字熟語」が必要だから体力は有っても字が読めない関取は格好の良い言葉を選ぶだけで神経が擦り減り肝心の相撲が弱くなるかも知れない。本来はそれで良いので勝ち負けを絶対視する競技と

は違って、相撲は「心・技・体」と言われるように農作物が無事に収穫出来たことを神様に感謝する行事が元であるから、清廉潔白、正々堂々、自分が誓った言葉に忠実に、態度敬虔で観客を感心させる力士を横綱にすべきで、張り手などの多様で相撲が強いだけの獐猛な力士は「暴れ役」として前座で見せ場を与えてやればよい。

漢字の始まりは神様の御意向を伺うために記録された符号だから一字一字に重要な意味があった。本来の字義である。時代の変化や漢字の乱用とまでは言えないにしても、手軽に使える漢字は使用者に「字義の重さ」を意識させないから、ともすれば「文字の心」が忘れ去られてしまう。近頃は中央・地方を問わず政治に携わる者が自分の名譽欲を満足させたり、勳章を貰うことを目的に「政治家」を選んでいろいろだが、大漢和辞典の教えを乞えば「政治」とは「まつりごと」、つまり邪馬台国の卑弥呼のように「私心を去り神様と婚姻し人民のために神の名代として国を統治する聖なる王」が行うことのようにである。

実在に異論はあるが、歴代天皇の中で「神」を名乗っているのは「神武・崇神・応神」の三代のみである。少なくともこの三代の天皇は卑弥呼の例に倣って祭政一致の政治を行っていたと考えられる。「政」の字は「正」に通じ、まず正しくなければならぬ。そして「人民の生活を支える」意味もある。また、「治」は「政を布き民を統御する」が第一義であるが、人情を正し安んずること、善い心を養い育てること、秩

序正しく収めることも意味している。そうなる国民の苦勞を無視して無駄遣いのし放題、足りなければ増税、その上に自分の事務所経費には甘く、悪党を子分にして恥じず、会合するには高級ホテル、冷暖房の効いた国会内で派閥の育成に現を抜かし、国内の凶悪犯罪、経済不安やら国民の生活保全には具体策を示さず、大臣になれば国内の実情も調べず先ず外国旅行など、さながら「土農工商」「封建時代」の感覚で庶民とは全くかけ離れたことをしている現在の自称「政治家」は全て偽物ということになる。

繰り返して言う。「政治」とは選ばれた者が神様に替って国民や国土を護るために行う具体的な役目である。勿論、選ばれる者は誰からも後ろ指をさされることのない身の回りの綺麗な人物でなくてはならない。テレビの娯楽番組や新聞の三面記事でチャホヤされたオッチョコチョイを名簿に載せて、お祭り騒ぎで国民から選ばれた議員などという制度は神を冒瀆するものである。序でに触れておくが「祭(まつり)」とは「人が神に接し神の恵みに報いること」のようであり政治(まつりごと)が正しく行われたことへの感謝である。ともすれば、祭りには酒を飲んで日頃の憂さを発散するタイプの人たちが多くようだがこれはお門違い、酒は人間が神様に近づくために陶醉状態になるための聖なる飲み物である。保存状態にもよるが、数年前に中国・西安市近郊で漢時代の貴族の墓から壺に入った二千年前の酒が見つかった。透明に近い青緑色の液体で芳香を放っており未だ飲める可

能性が高いということだった。お祭りにこそ山車や獅子舞いは止めて「政治家への不満」をプラカードに書き、酒の勢いを借りても街中をデモ行進して神様に訴えるのが本来の姿だと私は思っている。

獅子の寓話は極端ながら同じ音韻の漢字とともに「政」「正」「祭」のように同じような意味を持つ漢字も多い。そればかりか仮名を含む日本語も「天・点」「地・知」「飼い・買い」「亀・甕」「雨・飴」「川・皮」「土・槌」などなど限りなく同音異語がある。かの一休禪師が少年の頃、使いに行った先の主が館の手前に架かる橋の袂に「このはしわたるべからず」と立て札を出して一休さんがどうするか試した。一休さんは立て札を無視して堂々と橋を渡り、「端が駄目なので真ん中を渡ってきました」と答える頓智話がある。同音異語は「かけ言葉」として和歌・俳句のような日本独自の文学を生んだが、同音で無くても似たような言葉は聞き誤りもあり、日光の中善寺温泉と伊豆の修善寺(しゅぜんじ)温泉に同じ名前の旅館があつて予約を間違えた話も聞く。この場合、伊豆のほうを「しゅぜんじ」と正しく読まなかったことが原因だが、土地の名称や名字などは読み方の原則がある訳ではないから一つ一つ確かめる必要がある。問題の年金記録紛失騒動も、担当官僚が通り一遍の事務処理を勝手に続けていたからで、これこそ政治の意義を捨て去った罰当り行政で責任は歴代内閣にある。

たかが言葉や文字の違いとは言いが、昔から

「甲由田申（こうゆでんしん）は筆者の誤り、十千字（じゅつてんせんじ）は継母のはかりごと」と言われるように、時に小さな過失でも大きな問題に発展することがある。かの西南戦争の時に日本の歴史を変えるほどの小さな過ちの大事件があった。

近代化に着手したばかりの日本軍は、西郷隆盛のためには死を恐れない薩摩軍の抵抗に押されて前線は後退するばかり。辛うじて有名な「田原坂の決戦」に警視庁の抜刀隊を投入して血路を開き、一方で支援別働隊を八代口から上陸させた。この別働隊も薩摩軍の反撃に苦戦を重ねて、いよいよ陣を支え切れず指揮官は撤退を決意した。そこでラツパ手呼び「退け（ひけ）」と命令した。ところが戦場の騒音でラツパ手には「吹け」と聞こえたのである。戦闘中に指揮官が「吹け」と言えば突撃ラツパしかない。ラツパ手は反射的に突撃ラツパを吹きならした。必死に敵を防いでいた官軍の将兵は突然の突撃ラツパに驚いたが、命令とあれば突っ込むしかない。どうせ負け戦、死ぬ覚悟で一斉に陣地を飛び出して敵の中へ攻め込んだ。これがキツカケで八代口の戦闘は官軍が攻勢に転ずることが出来て、西南戦争の勝機を掴むことが出来た。「退却ラツパ」と間違えて「突撃ラツパ」を吹いてしまった気の毒なラツパ手は、軍律に従って処罰を受け、同時に褒美を貰ったという。それにしても「言葉と文字の力」と言うよりは、長い年月に亘って国の言葉を創りあげてきた先人たちの努力は偉大であると思わねばなら

ない。古代中国に発生した漢字が朝鮮半島を経由し、或いは直接に日本に伝わって来てから内容の真偽は措くとして「古事記」「日本書紀」「風土記」など古代の様子が推定できる記録を残した。さらに日本人は「仮名」「国字」を創り出し、文法を整え、漢字中心ながら「日本の文字」を確定して、多くの諺や格言を生み出したから、国民同士は躊躇い無く会話で意思が伝わるようになった。

漢字しかない中国では、先に述べたように多くの漢字を作って色々な状態を表現した。例えば縁起物の十二支（えと）に出てくる動物でも、ざっと調べたところ次のように関連する文字がある。（数字は概略文字数）「子（ね）：十二」「丑（うし）：二十三」「寅（とら）：十二」「卯（う）：二十二」「辰（たつ）：七」「巳（み）：六」「午（うま）：九十七、多くはその状態を表す文字」「未（ひつじ）：十三」「申（さる）：十五」「酉（とり）：十」「戌（いぬ）：八、ただし犬の場合は例えば、走る犬、噛み合う犬、吠える犬など、その状態を表す文字は七十ほどある」「亥（い）：三、ただし、犬と同様に状態を表す文字が二十以上あるが豚と混同している部分も多い」

午（馬）は重要な動物で最多なのは分かる。犬は身近にいてよく目に付くので「なめる」「短い尾」「怒る」などの状態を示す文字が多い。日本ではペットの代表のような「猫」が十二支にも入らず、文字も二つしかないのは、輸入動物だからであろう。猫の先祖はアフリカ大陸北部

産のリビア山猫だと言われる。本来、人間になつかない動物であるが、山林から迷って海岸部に出て来た子猫の何匹かがエジプト人に捕えられ、エジプトの女王が愛玩用に飼いならしたのが最初だと言われ、エジプトには猫の壁画やミイラがある。日本へは仏教の伝来に伴い経文を船で運んでくる際に鼠に齧られるのを防ぐため猫をガードマンとして連れてきたという説があるが、縄文時代の遺跡から猫の骨が出て、然も人間から餌を与えられていた形跡があるとか、大概の動物は食料にされていたのに猫だけが特別扱いされていた。やはり「猫は化ける？」：司馬遷の「史記」のほかに古代中国の神話と

伝説を伝える古書で秦の始皇帝が死亡した直後ぐらいに書かれたとされる「山海経（せんがいきょう）」も有名な史書である。ただ、山海経の場合は、各地方の山や海などの名称と、其処に棲む怪獣の紹介やら、荒唐無稽とも思われる物語を載せた原始的な地理書で、最初から「奇書」のレッテルを貼られたような扱いを受けていて、是までは史実として受け入れることが躊躇されていた。地元・茨城県の常陸国風土記も他国の風土記とは違って地域の伝説や古老の言い伝えなどを優先的に採録しているが、山海経なみに妖しい話は「晡時臥（くれふし）の山」伝説だけである。山海経のヒロインは西方の「崑崙山（こんろんさん）」に棲んでいた「西王母（せいおうぼ）」という神様で、顔は人間、牙は虎、豹の尾を持つ女性の仙人で不老不死の薬を持っていた。西王母は日本の「能」にも登場するとい

うから、神農さんも含めて古代の奇怪な神様は国際的だったのである。

山海経には揚子江上流山地の先に述べた「蜀(しよく)」の国に古くから伝わる複雑怪奇な話が投影していたと考えられていた。その話は例えば、4 mにも及ぶ金属製の「神樹」があるとか、目が突き出た巨大な仮面や2 mを越す青銅の人物像、目が縦に彫られた人物のマスク、未だ具体的な姿が確認されない龍の像などが記録として登場していた。それらの珍奇なものが中国に最初の文明を記した「殷」の遺跡にあるとする話ならば信用もされたであろうが、山深く隔絶された蜀の古代では神話の世界のこととして片付けられてしまっていた。ところが中国四川(しせん)省の省都・成都市から北へ40キロほど離れた田園地帯の三星村で1987年に「世界で最も注目すべき発見」とイギリスの新聞が報じた考古学の大発見がなされたのである。坑道の奥から三百点以上の玉石器、金器、八十本以上の象牙などと共に、多様な形の青銅器が発見された。それが山海経にも記録されていた奇怪な形のものであり、伝説と決め付けられていたことが一挙に現実のこととなった。

かつて中国と言えば黄河文明の国とされてきた。しかし今や、中国の歴史は稲作を中心とした揚子江文明の存在が大きな比重を占めている。漢字は黄河文明の賜物ではあるが、それを原形に近い形で継承しているのは中国ではなく日本であると思う。揚子江流域で発達した稲作も日本の農業技術が改良を重ねて今日の「日本の米」

を作りだした。物事を創始することは重要かつ困難なことであるが、それを正しく継承してゆくことも格段の努力を必要とする。

「政治(まつりごと)」一つを例にとっても、本来の文字を持つ「神に誓って正しい」意義に忠実であることは容易なことではない。文字の豊かな国に生きる者は文字の恩恵に感謝しつつ、人間として現代に生きる所感を、或いは過去の人々が主張しなかったであろう意思を後世の人

たちに正しく伝えていく義務があるように思えてならない。ともすれば文字を使い文章を書くことは敬遠され勝ちであるが、一つ一つの文字や言葉が、多くの先賢の努力によって完成したものであることに思いを致せば、それを最大限に活用してこそ、世界一豊富な文字を持つ日本人の証しであるような気がするのだが：

どうか皆さん文字を使って文章を書き、古代人の労苦に報いて下さい。

あなたの隠れた才能を

ことば座に発見してみませんか

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

ことば座「俳優塾」

朗読は演劇です。演劇とは劇(はげし)く演じることを言います。

朗読は演劇です。このことを忘れて、スラスラよどみなく標準語で読むものだと思いませんか。朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)表現者(朗読者)の心を演じることです。物語というのは、はじめに言葉があって紡がれるのではなく、はじめに作者の心があって、言葉に紡がれたものです。

その物語を朗読する時は、言葉に紡がれた作者の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)ドラマ(真実の心)を演じることが必要です。ことば座では、古里「常世の国」の物語を、「ふるさと文化大使」として朗読表現できる俳優を脚本・演出家白井啓治のマンツーマン指導で育成して行きたいと考えています。入塾は、小学4・5年生以上ならば年齢に制限はありません。特に、第二の人生を「ふるさと文化大使」としての気概を持って「ふるさと語り劇俳優」にチャレンジしてみたいと考える団塊の世代の方、大歓迎です。入塾時簡単な適性試験があります。

受講料：月額 30,000 円。詳しくはことば座事務局までお問い合わせ下さい。

ことば座事務局 〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35

TEL 0299-24-2063 Fax 0299-23-0150

先はまだまだ長く

近藤 渚

ことは座を立ち上げて、女優小林幸枝さんに「常世の国の恋物語百」の執筆を約束したのであったが、一年が過ぎて振り返ってみると十二月の公演分を入れてやっと十一話になる。百話というのは、今更の如く容易なことでないことを痛感している。

常世の国の風景や伝説、民話などをモチーフに、小林さんが手話の舞いに舞うことを前提にしての創作になるので、物語なら何でも良いというわけにいかないのが創作の手を遅らせるのである。

数日前に、二月公演の為の「鳴滝にて」(仮題)の検討稿が書きあがったところである。二月公演の脚本がまだ検討稿の段階というのは、井上ひさし氏のことを悪く言えないな、と反省しきりである。

物語のモチーフを鳴滝に決めたまでは良かったが、そこにとどのような恋物語を想像し、その恋物語に古里へのメッセージをどのように与えていくか、何時ものことであるが大いに頭を悩ませられる。今回は、何度か鳴滝に足を運んでいる中で、以下に紹介する舞いの詩が思い浮かび、この舞詩を軸に物語を組み立ててみることにしたのだった。

× × ×

『天 職』

私がこの世に命をもらう時

私は神から

あなたを愛することを命ぜられました。
私の与えられた天職は

あなたを愛することです。
私はあなたに逢うために

随分と遠回りをしてきました。

だからあなたのそばに来るのが

遅くなってしまいました。

でも私はあなたに逢うのが

遅すぎたとは思っていません。

私よりも少し早くに

あなたに逢っていたとしても

私はあなたのことを

天職を捧げる人だとは

思わなかったかも知れません。

だから遠回りしすぎて遅すぎたとは思いません。

私の天職はあなたを愛することです。

あなたがこの世に命をもらう時

あなたが神から

私を愛することを命ぜられました

あなたの与えられた天職は

私を愛することです

あなたは私に逢うために

随分と遠回りをしてきました。

だから私のそばに来るのが

遅くなってしまいました。

でもあなたは私に逢うのが

遅すぎたとは思ってはなりません。

あなたがもう少し早くに

私に逢っていたとしても

あなたは私のことを

天職を捧げる人だとは

思わなかったかも知れません。

だから遠回りしすぎて

遅くなつたとは思ってはなりません。

あなたの天職は私を愛することです。

私はあなたです。そして、あなたは私です。

× × ×

何の変哲もなく他愛もない詩である。しかし、この詩が浮かんで、ふと思った。

「私の天職はあなたを愛することです」このように思いながら、あなたという「古里」を天職として切実に愛することの出来る人は果たして何人いるのだろうか。

これから何度か見直しを図りながら、決定稿にまで持つていくのであるが、この詩を恋歌として舞う小林さんの表現の中に、「何と素晴らしき古里」と気付けさせるような、いやメッセージするような強さを物語りに持たせなければと思っている。

鳴滝を、恋というテーマで眺めてきて、改めてこの地を「まほろばの里」と大声してみたくなった。

編集事務局

〒315・0001

石岡市石岡13979・2

TEL 0299・24・2063

(白井啓治方)